

大正六年二月一日發行

# 十全會雜誌

卷二十二第

號二第

(號三十三百第)

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌 第二十二卷第二號 目次

○原著及實驗

●石川縣下ノ赤痢菌型ニ就テ。

金澤醫學專門學校衛生細菌學教室  
(主任教授兒玉博士)

時 國 恒 夫

●實驗的鼠咬症ノ病原體研究。

長 岡 病 院

金澤醫學士 水 口 哲 三

○抄 錄

●一二外用藥ノ濃度ニ就キテ。 須 藤 憲 三

●脚氣血液ノ殘餘窒素量ヨリ觀タル脚氣腎ノ機能ニ就テ。

醫學士 有 馬 英 二

●鹽類利尿及淋巴形成ニ就キテ。 柳 川 華 吉

○雜 錄

●上洛之記。

○通 信

●井上弘氏通信。 ●岡村重武氏通信。

○人 事

●諸角友平氏の大光榮。 ●中川博士。 ●北豐吉氏。 ●福田美明氏。 ●轉居。 ●居所不明。

「スピロヘーテ」血液塗布標本ギムザ氏染色法ニヨル）ヲ掲載スベキ筈ナリシモ本會經費ノ欠乏ニヨリテ省略スルコト、セリ原著者及讀者諸君ニ深謝ス。

## 抄 録

### ●一二外用藥ノ濃度ニ就キテ

(日新醫學第六年第二號)

須藤 憲三

著者ハ先ツ等張溶液ノ由來及蒸留水ノ生物細胞ニ對シテ有害ナルコトヲ説キ、生理的鹽溶液方治療上ニ應用セラルト尠シトセザルモ、從來用キラレタル吸入劑ノ濃度ノ如キハ何等理論的ノ根據ヲ有セズトナシ、ソガ處方ヲ變更シテ等張性トナスノ合理的ナルベキヲ論シ、其方法ヲ明示セリ。

著者ハ亦涙液ヲ分析シ、且ツ同涙液ニ就テ結氷点降下度ヲ測定シ〇・六三度ナル數ヲ得タリ。涙液ノ結氷点降下度ノ測定ハ恐クハ著者ニ依リテ始メテ行ハレタルモノナルベシ。然レハ此涙液力健康者ヨリ得タルモノニ非ズシテ水泡性角膜炎患者ノ分泌液ナルガ故ニ、ハンブルゲル氏ノ實驗數ニ基キ一・四％ノ食鹽水ヲ以テ涙液ノ等張溶液トナスノ可ナルベキヲ説キ、從テ洗眼用食鹽水ノ濃サハ須ク一・四％ノ食鹽水ヲ用フベシトナセリ。著者

ハ更ニ眼症法用トシテ用キラル、硼酸ノ濃度ト其結氷点降下度ヲ測定シテ一・四％ノ食鹽水、要之涙液ト等張性ノ硼酸水ノ濃サハ二・八％ナルヲ明カニシ、且ツ硼酸一・四瓦、食鹽〇・七瓦ニ水ヲ加ヘテ百耗トナシタルモノモ亦タ一・四％ノ食鹽水ト等張ナルヲ實驗的ニ証明シ、實地醫家ノ試用ヲ促セリ。(著者抄)

### ●脚氣血液ノ殘餘窒素量ヨリ觀タル

#### 脚氣腎ノ機能ニ就テ

(東京醫學會雜誌第三十卷二十一號)

醫學士 有馬 英二

著者ハ脚氣患者血液(及組織液)ノ化學的研究ニ關スル史乘ヲ抄述シ、京城ニ於テ、廿六名ノ脚氣患者ニ漏血ヲ行ヒ、田中重雄氏「メチユール・アルコホル法」ニ依リテ測定シタル血液殘餘窒素量ヲ列記セリ。其結果ハ次ノ如シ。

知覺運動型患者(十三例)ノ血液殘餘窒素量ハ血液百耗ニ對シテ三二・七一六・一〇珣平均四五・〇二珣。浮腫型(四例)四一・二一六・〇〇珣平均四六・〇珣。急性惡性型(九例)四六・七・七三・〇珣平均六七・二七珣。之ヲ大西氏が健康日本人ニ就キテ得タル血液殘餘窒素量(一四・〇一三・〇三珣)ニ比スルニ著シク増加セルヲ認ム。又著者自身ガ行ヘル朝鮮人ノ非脚氣・非腎臟炎患者ニ就キ行ヘル成績(二八・四一・三七・四珣)ニ比スルモ亦著明ノ增量ヲ示セリ。

著者ハ次ニ脚氣腎ノ病理的變化及脚氣患者ト腎炎及心臓病患者ノ殘餘窒素量ヲ比較シ、脚氣ニアリテハ如何ニ重症ナルモ尿毒症ノ如ク二〇〇・砵以上ノ血液殘餘窒素ヲ見ズ。而シテ血液殘餘窒素量ヨリ見ル時ハ脚氣腎ノ機能障礙ノ程度ハ慢性實質性腎炎及鬱血腎等ニ匹適スルヲ説ケリ。然レモ脚氣ノ血液殘餘窒素量ノ増加ハ、心臟血管障礙ニヨル鬱血腎ノミニ歸スル能ハズ、恐クハ脚氣腎ノ機能ガ体内蛋白質分解ト並行セザルニ因ルナラント。

著者ハ最後ニフエノールズルフォシフタレイン法ニヨル脚氣腎研究試驗成績ト、血液殘餘窒素測定法ニ依ル結果トヲ對比シテ、乙法ノ遙ニ甲法ニ優レルヲ説ケリ。(醫化學教室内海抄)

### ●鹽類利尿及淋巴形成ニ就キテ

(東京醫學會雜誌第拾卷第貳拾參號)

柳川 華 吉

著者ハ犬ノ靜脈内ニ食鹽及硫酸曹達溶液ヲ注入シ、以テ鹽類ノ利尿及淋巴生成作用ヲ檢シ、殊ニ腎細尿管ノ再吸收作用説ノ是非ニ注意セリ。著者ハ先ヅ食鹽及硫酸曹達ノ等分子溶液ヲ同一條件ノ下ニ靜脈内ニ注入スル時ハ、食鹽ハ淋巴流ヲ促進スルコト硫酸曹達ニ優リ、利尿作用ニ於テハ前者ハ後者ヨリモ劣レルコトヲ証セリ。次デ飢餓時ノ淋巴液ノ「クロール」濃度ハ、常時ト大差ナキモ、尿中ノ夫レハ著シク減少シ、濃厚ナル食鹽溶液ヲ注入スレバ、淋巴液ニ於ケル食鹽濃度ノ變化小ナルニモ拘ラズ尿ノ夫レ

ハ甚ダ大ニシテ、而モ尿ノ食鹽濃度ノ淋巴液ノ夫レヨリモ大ナルハ極メテ短時間ナルヲ指摘シ、且濃厚ナル硫酸曹達溶液ヲ注入スレバ尿ノ「クロール濃度」ノ減少スルヲ實驗シ、食鹽及硫酸曹達ノ混合液ヲ注入スルモ、兩邊ノ尿中ニ排泄セラル、量ハ平行スル事ナク、食鹽濃度ハ下降シ、總硫酸濃度ノ増加スルヲ認メタリ。

著者ハ以上ノ實驗ニ基ヅキ腎ノ細尿管ノ再吸收作用ヲ否定シ、却テ腎細胞ノ機能ハ、血液(又ハ)淋巴液内ノ鹽類含有量ノ小ナル動搖ニヨリテ著シキ變化ヲ惹起スルモノナル可シト附言セリ。(醫化學教室橋本學抄)

## 雜 錄

### ●上 洛 之 記

大正五年十二月京都帝國大學々友會辯論部主催全國直轄學校第壹回聯合大演說會及同學友會弓術部主催(高等學校、專門學校弓術優勝競射會開催に就テ當金澤醫學專門學校十全會講話部より醫四垂水正保君同弓術部より醫四、秋永靖海君。同、柏木正章君。醫一、小栗岐式君。藥二、土肥政藏君。さ小生この六名上洛せり。

大演說會は十二月廿七日午後一時開會、會場京都帝國大學學生集會場階上にして演說順序左の如し。

一、開會之辭

京大 吉 田 一 枝君

- 一、一將成功萬骨枯  
 七高 松岡龍 郎君
- 一、内的生命の開拓  
 六高 吉岡永 美君
- 一、世界の大勢と我國の前途  
 三高 中村豊 一君
- 一、榮ひある成功  
 京、高、蠶 小野 速君
- 一、政治の藝術化  
 四高 小原正 樹君
- 一、文明生活の齎す疾病  
 金學專 垂水正 保君
- 一、金色の花  
 二高 石濱知 行君
- 一、大根畑より  
 八高 木崎爲 之君
- 一、所感  
 文科大學教授 內藤虎次 郎氏  
 文學博士 小川郷太郎氏  
 法科大學教授 土田 茂君  
 京大 博士
- 一、挨拶  
 京大 博士
- 一、閉會之辭

以上 出演者時間は二十二分以内、但し教授は此限にあらず。

會終りし時既に太陽は没して月光明かなりき當日午後六時より内藤湖南博士、小川郷太郎博士、佐藤丑松博士の三教授を始め大學辯論部委員各學校撰手一同晚餐を共にし盛會裡に午後十時散會せり。

弓術部に於ては二十七日より二十九日迄の競射にして參加學校は二高以下八高に至る七校と金澤醫專、愛知醫專、大阪高商の十校を算し各學校撰手五名づゝ一人、一日八射三日間を通じたる中り數のゲザムとサムを以て優劣を決定し最優勝校に優勝弓を授與さる事となり、先づ、廿六日午後六時學生集會場に於て各學校弓術撰手歡迎茶話會開かれ學友會々長荒木寅三郎博士、監督田島錦治博士、審判長跡部定次郎博士、笠原方正及市川虎四郎同師範を始め各學校撰手同學弓術部委員等約八十名相會し田島博士、弓

術の真意義、跡部博士競射會の主旨に就て各興味ある演説あり一同快談に時の移るを識らず撰手の意氣は堂に充ち何れも翌日の成功を期しつゝ十時散會せり。

越て翌日より豫定の如く三日間競射ありしが寒風凜烈特に廿八、九兩日の如きは積雪八寸に及び爲めに的薄暗く辛じて辨別し得たる事さへありたり以上競射終り會長より優勝弓を四高に授與優秀撰手に賞品授與せられ本校にては秋水君選に入る。

因に記す小生の知人三高生曰く「金澤醫專垂水君の演説は趣味深く總てを通じて非常にむまかつた」と驕つて我が弓術部は諸勇士の奮闘も心身の置き所を異にしたる小生の爲に不測の敗を招きしは全く小生修養の足らざる所と返すゝも残念なり然れども我が講話部の成功は以て幾分小生の心を慰むるに足るご感謝して此稿を終る。(醫四、藤野生)

## 通信

### ●井上弘氏通信

(大正五年卒業。小倉紀念病院耳科)

(前畧)弊院は創立後日尙淺き故研究材料及書籍等は未だ意の如くならず候弊院は始め當小倉市に於て耳鼻咽喉科にて開業し居られし次郎丸真次(名古屋出身)氏の創立にかゝるものにして尙同氏本院の院主に候ひしも本年

一月より小生精細は存ぜず候へ共本院長副島博士が買収されしものと承て居り候故に只今にては副島博士の全權にあるものゝ如くに候

而して本院の診察所などは立派に建築されしものに候へ共病室は舊在の藤本外科病院を使用仕居候只今病室及診察室は増築中にて候本院は當今は内科。外科。兒科。産婦科。耳科に分れ居り候へ共本春の後りまでには眼科。皮科。整形外科を置かるゝこの事に候部長は内科一部武田鹿男博士。第二部醫學士村上純一氏。外科副島豫四郎博士。兒科檜林學士。婦人科明北學士。耳科が小出源吉學士にて皆々京大系の人々にて候醫員は名古屋出身四名。京專三名。金澤二名。新潟一名。長崎一名にて候金澤よりは一昨年卒業の小林春平氏内科に勤務し居られ候尙眼科。皮科と追々に分科致すべく候間御希望の人あらば母校發展のため御盡力の程願ひ度候本院外來は只今にては二百名程にて入院百名程にて候我が耳鼻は外來平均五六十名にて仲々の多忙を感じ居り候

尙當地にはワイル氏病比較的多き様感じられ候

小倉市には同窓生として鐵道院九州管理局小倉工場醫局に二名。第十四聯隊醫務室に一名居らるゝこの事小生折あらは同窓會相催し度心組に候

小倉市寶町三丁目

小倉紀念病院内

一月十二日

井 上 弘

## ●岡村重武氏通信

(大正 年卒業。札幌病院耳科)

(前署)當地の冬は比較的降雪少く積雪の量は金澤位に候(但し札幌以北、こに北見は一丈以上にも及ぶ)只寒氣強く廊下に於て攝氏零下十度以下に下る事稀ならず候然れ共家々には「ストーブ」を備付け薪をたき家の構造亦内地と異り殆ど和洋折衷の形にて寒氣の浸入を防ぐを以て室内は常に溫度に保ち居り候

只吹雪は北海道の名物かぞ存じ候其すまじき事筆も及ばず候冬期は風激しく且雪とけずしてはらへばらへ落つる故傘は絶対に用ゐず候冬の交通機關は悉く橇こに馬橇に候

區劃井然として廣々たる北海道のすべての街路は冬に至りて一面の凝雪と變じ其中を縱横に橇の滑走する様は内地人の想像する能はざる畫面に候札幌小樽兩區に母校出身者十五名有之毎年一回懇親會相催し候其他の方面にもかなり同窓者有之皆盛に活動致し居られ候

小生勤務せる區立札幌病院は博士石原弘氏を院長に載き醫員卅名、設備頗る整頓充實し常に二百五十名の入院患者あり「ベット」を明けし事無之外來患者一日五百乃至七百に候實に本道隨一にて患者全十一州より遠く樺太方面よりも増集致し候それが爲め折々珍らしき患者も有之候小生は不相變耳鼻咽喉科に精勤致し居り候(後暑)

北海道區立札幌病院耳鼻咽喉科

一月元旦

岡 村 重 武

## 人事

## ●諸角友平氏の光榮

諸角氏は明治三十一年本校を卒業して一年志願兵となり除隊後郷里能登宇出津にあつて開業し日露戰役に出征して偉勳を現はし後ち自宅開業に従事して僻地の患者を診療すること最も親切を極めて地方の評判最も喧し殊に昨年全地に於て虎疫の流行するや全氏は身を犠牲に供して其防疫に従事し一ヶ月以上家人と別居し普通患者の診療を謝絶し大に其私財を投じて全町の防疫事務に没頭したる其義俠的美譽は縣當局者に於ても其表彰の準備中ありとの評判なり

尙ほ全氏は醫療上に偉蹟あるのみならず更に政治上にも奔走し全地方政友會の重鎮となり縣會議員に當選せられて謬々の政論を吐きて議場の花形たり全地の自治機關は一に全氏の方寸によりて支配せらるゝと云ふ其勢力の偉大なる推測するに難からず是れ全く全氏の人格の崇高なるによりて諸人の信用を博するに至りたればなり

更に此新年宮中の御歌會に於て本年の敕題「遠山雪」には全國より詠進せる二万三千首以上の多數中より首位を以て入選せられ阿 陛下の御前に於て御披露の光譽を得たり聞く選歌は只に歌の優秀なるのみならず之を詠じたる歌人の人格も優秀たらざるべからずと果して然らば全氏此度の入選は只

だに文學者としての大光譽なるのみならず人格までの優秀なるを公認せられ國民として無上の光譽と云ふべし依て全氏の知人相謀り一月二十二日北間樓に於て別記北豐吉氏の歡迎を兼ね諸角氏の祝賀會を開き來會者六十名以上に達し盛會を極めたり尙ほ全氏祝賀紀念品贈呈の計劃あり來三月の誌上にて報道せん

全氏の選歌左の如し

遠山雪

あさやかに今朝は見にけり見ぬの日も

ありし遠山雪のつもりて

選歌の光譽に浴して

うれしさのあまり泣きけり上もなき

今日のほまれの身をかへりみて

## ●中川博士

中川幸庵氏は明治廿七年本校を卒業し後ち東京永樂病院内科主任醫となりて永く研究に従事し後ち卅七八年頃臺灣に渡り花蓮港醫院より新竹醫院長に轉じ主として寄生虫殊に肺「サストマ」の中間宿主を發見して先きに北里研究所より淺川氏奨學金を受領し名聲噴々たりしに此度京大教授會議の推薦によりて醫學博士の學位を受領せられたり。全氏は沈思默考。用意周到の篤學者にして此名譽は當然のこと乍ら吾校の名譽も又大なりと謂ふべし。

●北 豐吉氏 全氏(三十年卒業)は昨年來文部省に新設せられたる學校

衛生官に任命せられ我國學校衛生の重擔者となりて計劃活動中なりしが  
昨一月十八日より二十日に至る三日間岐阜市に開催せられたる學校衛生  
講習會に講師として講演せられ二十一日より二十三日に至る三日間金  
澤市に開かれたる石川縣下の學校醫會に臨席せられて學校醫と學校當局  
者との關係に就きて一場の講演ありたり。該會には五十名計り出席し本  
校よりは土肥博士(學童の皮膚病)、兒玉博士(肺結核問題)、松原博士  
(精神異常兒、低能兒、天才兒、變質兒、不良少年)の三教授の講演あり  
たり尙ほ二十二日夜北間樓に於て全氏の歡迎及諸角友平氏の祝賀會あり  
たり尙ほ二十五日鏝基樓に於て學校教授の全氏及學校教育參觀のため來  
校の稻葉博士の歡迎會ありたるも都合により北氏の臨席なかりき。

●福田美明氏 全氏(四十一年卒業)は卒業後金澤病院神經科にありて斯  
學を研究し次で富山市に於て神經科及内科を以て開業したるに全氏の學  
識と人格と手腕とは忽ちにして全市のみならず廣く富山縣下全体の醫士  
と患者との信用を博するに至れり依て益々其業務を發展し此度富山市の  
南部に於て富山腦病院を新築し義兄加納景成氏は耳鼻科、全氏は神經病、  
精神病、内科病の診療に従事し入院患者約二十名を収容するに足るべき  
設備を整へ昨年本校を優等卒業せる牧有義氏を聘して病院醫となし目下  
活動中なり全腦病院は景色絶佳の地に位し電車の便あり爲に神經病者の  
収容治療に最も適當する所あり故に其益々發展せんことを斯して待つべし

### ●轉 居

青森縣弘前市歩兵第五十二聯隊	吉井康次郎(三六)
伊豆熱海。東京第一衛戍病院熱病分院	石橋四郎(三七)
東京本郷區弓町二ノ一〇	松井源長(三八)
北海道札幌區大通西七ノ二、帝國生命札幌支店	松山清(三九)
吳軍港軍艦扶桑	小出貞次郎(三九)
千葉縣東葛飾郡市川町野砲兵第十七聯隊	平野郷次郎(四二)
金澤衛戍病院附	角田眞一(四三)
臺灣山砲兵第一中隊	太田外茂次(大ニ)
東京第一衛戍病院	柴田一男(大ニ)
金澤市長町五番丁聖靈病院	松田外二郎(大四)
金澤市穴水町二番丁一二	川越清造(大五)
濱松歩兵第六十七聯隊附	兼子周吉(大五)

  

東京市牛込區陸軍戸山學校醫務室	福岡拾雄(三七)
遼陽衛戍病院附	吉澤祐寛(四一)
京都市上京區大宮通下長者町下ル	糸川角次郎(大元)

### ●居 所 不 明